

(1) 安全と安心を

東日本大震災から1ヶ月を経て、ようやく被災地での復興に向かう槌音が活発に聞かれるようになって来ましたし、被害の無かった首都圏などでの日用品買いだめ騒ぎとそれ以後の節約・自粛ムードも収まって来ています。ただ東電福島第1原発事故に伴う放射性物質への不安感への拡がりだけは益々エスカレートする気配もみられます。”ベクレル”や”シーベルト”、”放射性物質”、”被曝”などが新聞やTVなどで頻繁に見せ付けられる前に心穏やかにいられない心情にもなってしまいます。

確かに人々を混乱に追い込ませない為にも、科学的に正確に測られた数値をもって証明されることは大切なことですが、あの数字をどのように受け止めるかは、人それぞれであるだけに評価もむずかしいものがあります。安全と感じるか、いや不十分であるかについては、個人差が大きいだけに万人が納得する尺度だと言い切れるでしょうか。特に、食品に関する安全性に神経質になりがちですが、これは食品の持つ特性からくるものでしょう。

1. 直接体内にとり入れる消費形態であること
2. 日常的に消費されること
3. 危険をもたらす原因が単純でなく複雑に絡み合っていること
4. 次世代に影響を与えること

放射能に侵かされた品物を一年以上食べ続けたとしても大丈夫というのは、科学的手法による測定値であり理解は出来ますが、安全性が正確に測られたものと言いながら、それをもって安心するか否かは個人差が大きく、正に十人十色で受け止め方は千差万別と言わざるを得ません。加えてそれぞれの人が置かれた環境によっての感情論やいわゆる風評なるものなど、安全とは無関係なものが入りこんでしまう怖れが常に付きまともって来ます。

”直ちに影響が出る数値ではないが、出来れば控えた方が・・・”とは、官房長官の記者会見などでよく耳にしますが、これを是とするか否と考えるかは個々人の心の問題です。前段を主とするか後段を取り上げるかによって、以降の行動を自ら縛りつけてしまうものです。それだけに情報発信する側では曖昧などっち付かずともとれる物言いではなく、右か左かをはっきりと識別できるような話題提起をすべきではないでしょうか。受ける側にとって危害が及ばないと確信出来ることが安心であり、そう信じるに足る尺度を示すことが大事だと思います。

(鈴木重雄筆)